

兵庫県医師会医療支援チーム（第33陣）「宮城県災害支援現地報告」

尼崎市医師会 小倉 哲

私達の第33陣は、医師3名、看護師3名、薬剤師1名、事務員2名の計9名で1チームを編成しており今回のチームを一つのくぎりとして次陣（第34陣）からは、医師1名、看護師2名、事務員2名に縮小されていく予定である。石巻中学校の2階の教室に設けられた便利な医療救護所も避難者の方々の自立へ向けた方針のためか閉鎖に向けての準備が進んでいる。5月28日 この教室で診察した患者さんの主訴は数名の方が、のどの痛みを訴えて診察に訪れる具合でほとんどの方は気管支喘息、不眠症、高血圧症などの慢性疾患である。その後は、慢性疾患の患者さんには今後、地元のかかりつけ医に紹介状を書いて、通院していただくように勧めていく事が現在の主な仕事になっている。ただ、通院可能な診療所の住所がわからず、患者さんと地図を見ながら考える場面が幾度もあった。「かかりつけ医は、どこでしたか？」と聞くと「あっこのお医者さんも家と一緒に流されたべー、でも死亡欄に名前がないからどっかで生きとっべー」と返事が帰ってくる。何と返事していいのかわからず、胸がつまる思いである。震災から、2ヶ月以上たって人々は、自立へ向けて、がんばるように言う。しかし、約5分の津波であたりが水深5m以上の真っ黒なヘドロの海に変わり、人生で築きあげてきた全ての物や友人、そして子供を含む家族を奪ってしまった。被災者の心の中でぐちゃぐちゃにもつれ絡まった心の糸を1本1本丁寧にほぐして行くのは、あまりにも2ヶ月は短すぎる時間ではないかと思う。精神的・社会的・経済的弱者に強くなれというのは、私には言えなかった。最後に、被災地に行くと言った時に「がんばって」と笑顔で送り出してくれた妻がカバンの中に忍ばせてくれたインスタントコーヒーを飲みながら、しみじみ家族の暖かさを感じている。